

国語科学習基本語彙の研究

河内 昭浩

Research of Japanese Study Basic Vocabulary

Akihiro KAWAUCHI

群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編

第73巻 23—34頁 2024 別刷

国語科学習基本語彙の研究

河内 昭浩

群馬大学共同教育学部国語教育講座

(2023年9月27日受理)

Research of Japanese Study Basic Vocabulary

Akihiro KAWAUCHI

Department of Japanese Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 27th, 2023)

1. 国語科学習基本語彙研究の問題の所在

これまでの国語科学習基本語彙研究の成果は、全国大学国語教育学会編著『国語科教育学研究の成果と展望Ⅰ～Ⅲ』の項目「国語科学習基本語彙研究の成果と展望」(Ⅰ、Ⅱの項目名は「国語科学習基本語彙研究の成果」)にまとめられている。2000年ごろまでの成果はⅠに、2001年から2010年ごろまでの成果はⅡに、そして2011年から2020年ごろまでの成果は、筆者自身がⅢに整理している。また、大正8年から平成10年ごろまでの学習基本語彙研究に関する各文献の詳細が、国立国語研究所(2000)に記されている。また別に、甲斐睦朗・石黒由香里(1993)、神戸大学教育学部語彙指導研究会(1985)、塚田泰彦・池上幸治(1998)、井上一郎(2001)、甲斐睦朗(2020)などにおいて、これまでの学習基本語彙研究がまとめられている。

国立国語研究所(2000)を見ると、そこには122もの語彙集があることを確認できる。しかしそれらは未だ、国語教育の研究と実践に十分に生かされてきているとは言えない。甲斐睦朗(2020)には、国語科学習基本語彙に関する23編の文献が掲げられたのち、次のように記されている。

今後は、これらの貴重な成果を継承して学習基本語彙の選定の問題を正面から考える必要があるし、逆に語彙指導の実際面からは、それらの成果を洗い直してみる必要もある。語彙分析の成果に関してはよくやったという称賛が先行し、学問的な批判は行われていないのが実情である。また、実践的な活用の試みもごく少ない。そこで、これまでの成果を受け入れながら、なぜ埋もれてしまうのか、どこに問題があるのかを検討する必要があるわけである(「学習基本語彙選定の歴史」、p.167)。

「よくやったという称賛」があるかどうかは定かではないが、「語彙分析の成果」について、つまり選定された語彙そのものや、その選定方法についての「学問的な批判」があまり行われてきていないのは事実である。これまでの国語科学習基本語彙集の概要、目的や方法、規模等については、すでに前述の文献、特に国立国語研究所(2000)に詳しい。しかしその中でも、それぞれの語彙集で選定された具体的な語彙そのものの検証はごく一部しか行われていない。

またさらに、それら語彙集同士の比較研究も十分には行われていない。国立国語研究所（2009）では、田中久直（1956）、阪本一郎（1958）、児童言語研究会（以下、省略時は「児言研」と記す、1962）などの7種の語彙集がデータ化されている。それにより、どの語が、7種の語彙集のいずれに収められているかを一覧することができる。しかし、データ化された語彙集の目的や方法、規模が異なるため、データの比較から、選定された語彙そのものについて、また選定方法についての特徴を見出すことは難しい。

以上のように、国語科学習基本語彙研究においては、語彙そのものや選定方法の検証、語彙集同士の比較検討が不十分であることが課題として挙げられる。そこでこうした状況を踏まえ本研究では、選定方法等は異なるものの、規模の近い語彙集の語彙を比較検討していく。そしてさらに、選定方法等の違いが、選定される語彙の違いにどのように表れるかを明らかにしていく。

その前に、これまでの国語科学習基本語彙研究の課題として、(1) 語彙選定の目的、方法、規模、名称が多様であることと、(2) 語彙選定における基準が多様であること、の2点について改めて詳細を整理しておく。

(1) 語彙選定の目的、方法、規模、名称が多様であること

国立国語研究所（2000）では、122の文献が、目的や内容に応じて11の系統に分類されている。11の系統は以下の通りである。

- ・ 児童・生徒の理解語彙の調査
- ・ 児童・生徒の使用語彙の調査
- ・ 教科書の用語調査
- ・ 幼児・児童の読物類の調査
- ・ 漢字と語彙の調査
- ・ 基礎日本語の選定
- ・ 基本語彙の作成
- ・ 日本語能力育成のための基本語彙
- ・ 言語調査のための基礎語彙
- ・ 学校生活全領域学習用語

- ・ 国立国語研究所の語彙調査

そのうち「基本語彙の作成」という系統には以下の4つの項目が立てられ、22の文献が振り分けられている。

- ・ 理論的な試みとしての基本語彙
- ・ 表現力を支える基本語彙
- ・ 理解力を支える基本語彙
- ・ 思考力・認識力を支える基本語彙

先に触れた田中（1956）は上記の「表現力を支える基本語彙」、阪本（1958）は「理解力を支える基本語彙」、児言研（1962）は「思考力・認識力を支える基本語彙」に分類されている。こうした目的や内容の多様さは、国語科学習基本語彙研究の広がり性を示していると言えるだろう。しかし、それぞれ異なる目的や内容であるがために、比較されることは少なく、また学校現場に定着するには至らなかった。

また方法や規模についてもさまざまである。

先に触れた語彙集だけを見ても、方法や規模がさまざまであることが分かる。田中（1956）は小学校国語科教科書7種中3種の教科書に見られる語彙を抽出し、学年別に振り分けている。語数は3,469語である。阪本（1958）は、辞書『言林』所収の語を起点に、国語教育の専門家による判断を点数化し、総数で22,500語を選定している。児言研（1962）は、辞書『三省堂・国語辞典』と現場教員の判断から、1,850語を選定している。

なお本研究では、「思考力・認識力を支える基本語彙」に分類されている児言研（1962）や神戸大学教育学部語彙指導研究会（1985）などを取り上げるが、詳細は次節に述べる。

またさらに、目的、方法、規模の異なりと相俟って語彙集の名称もさまざまあり、未だ明確に定まっていない。本研究で後に取り上げる4編の語彙集は、規模は近いが、名称はそれぞれ異なる。

各名称は以下の通りである。

- ・ 児童言語研究会（1962）：「国語科教育基本語い」

(「語い」はママ)

- ・神戸大学教育学部語彙指導研究会（以下、省略時は「神戸」と記す、1985）：「教育基本語彙」
- ・井上一郎（2001）「国語科学習基本語彙」
- ・バトラー後藤裕子（2011）：「学習語彙」

神戸（1985）は、阪本（1958）と同様に「教育基本語彙」という名称だが、両者の目的や規模は大きく異なる。また本研究では、全国大学国語教育学会編著『国語科教育学研究の成果と展望Ⅰ～Ⅲ』の区分に倣い、語彙集の総称を、井上（2001）と同様に「国語科学習基本語彙」としているが、井上（2001）そのみを指しているわけではない。

こうした名称の異なりも、目的や内容の多様さ同様に、研究の深まりや学校現場への定着に欠けてきた要因であろう。

(2) 語彙選定における基準が多様であること

田中牧郎（2015）は、これまでの学習基本語彙研究の課題に「選定や段階分けの基準（根拠）の明示」（p.4）があるとしている。具体的には阪本一郎（1984）、中央教育研究所（1976）を例に挙げている。阪本（1984）は阪本（1958）の改訂版だが、語の入れ替えについて「その根拠や入れ替えた語のリストが明示されておらず、その改定が時代の変化に対応したものであったかや、語彙教育研究の進展に基づいたものであったかが検証できず、曖昧なものになってしまっている」（p.3）としている。また中央教育研究所（1976）については、国立国語研究所の語彙調査データを利用しながら、「語彙調査に基づいた抽出を行いながら、段階分けは全面的に専門家の判定によっており、語彙調査データから得られる豊富な情報が段階分けに生かされていないという問題がある」（p.4）としている。

本研究で扱う4文献も、詳細は次節で述べるが、基準はさまざまである。成立年を経るごとに、より客観的な根拠に基づく選定になっていくが、全てが客観的な根拠に基づくということにはなっていない。そもそも国語科学習基本語彙選定において、どこまでを客観的な根拠に基づくべきか、あるいは、教育

者の規範意識による選定はどこまで許容されるものか、明確な答えは未だ出ていない。また仮に全面的に客観的な根拠に依拠したとしても、その前提となる言語の実態は日々変化していく。また別に、客観的な根拠となる資料も、辞書であったり、教科書であったり、一般社会の言語実態であったり、さまざまである。

語彙選定の目的、方法、規模、名称、基準等が多様であることの全てが問題であるとは考えていない。今後も諸分野、諸科学の立場からの提案があつて然るべきであろう。しかし一方で、いわば百花繚乱のままでは国語科学習基本語彙研究の進展、さらには国語科語彙指導の進展につながらない。

そこで本研究では、規模の近い4種の語彙集の語彙そのものについて比較検討を行う。まずは扱う4種の語彙集所収の文献の詳細を次節で述べる。

2. 比較検討する語彙集の概要

本研究で比較検討の対象とする語彙集の収められた文献は以下の4編である。

- (1) 児童言語研究会（1962）『言語要素指導』明治図書
- (2) 神戸大教育学部語彙指導研究会（1985）『教育基本語彙の体系化とその指導方法の究明』神戸大学教育学部
- (3) 井上一郎（2001）『語彙力の発達とその育成—国語科学習基本語彙選定の視座から—』明治図書
- (4) バトラー後藤裕子（2011）『学習言語とは何か—教科学習に必要な言語能力—』三省堂

また、各文献に収められた語彙の概要は以下の通りである。

- (1) 児言研（1962）
 - ・総語数：1,850（小：719、中：1131）
 - ・主な選定資料：国語辞典（三省堂）
 - ・主な判断基準：教育者判断

- ・選定の考え方：思考や認識を活動させる表現
- (2) 神戸 (1985)
 - ・総語数：1,736 (小：729、中：1007)
 - ・主な選定資料：『新教育基本語彙』
 - ・主な判断基準：教育者判断
 - ・選定の考え方：学校で習得させるべき語
- (3) 井上 (2001)
 - ・総語数：1,663
 - ・主な選定資料：先行研究文献、語彙力調査
 - ・主な判断基準：総合的判断
 - ・選定の考え方：国語科語彙指導との関連
- (4) バトラー後藤 (2011)
 - ・総語数：1,230
 - ・主な選定資料：教科書コーパス
 - ・主な判断基準：コーパスにおける頻度
 - ・選定の考え方：一般的でなく多くの教科で頻度が高い

上記4文献所収の語彙集は、総語数がいずれも1,500字前後であり、語彙の規模が近い。参照としてここまで引用してきた主な文献所収の語彙集の総語数を挙げると以下の通りである。

- ・阪本 (1958)…22,500 語
- ・中央教育研究所 (1976)…4,589 語
- ・阪本 (1984)…19,271 語

また(1)児言研(1962)と(2)神戸(1985)は、国立国語研究所(2000)において、同じ「思考力・認識力を支える基本語彙」に分類されている。(3)井上(2001)、(4)バトラー後藤(2011)は思考や認識に限定している語彙ではない。ただし詳細は後述するが、(3)井上(2001)は「語彙構造及び認識構造のそれぞれの中核となる語を選定した」とあり、(1)児言研(1962)の語彙選定の考え方に近く、また(4)バトラー後藤(2011)は日常語を対象外としていて、(2)神戸(1985)の語彙選定の考え方に近い。

また別に、(1)児言研(1962)と(2)神戸(1985)は、基礎資料はあるものの教育者の判断によるとこ

ろが大きい。(3)井上(2001)は、これまでの学習基本語彙研究の成果が総括的に取り入れられているが、判断の論理的根拠は明らかにされていない。(4)バトラー後藤(2011)は、コーパスの実証的なデータを基にしつつ、一部教育者の判断を加えている。

次節で、(1)～(4)の語彙集の共通点と相違点を明らかにし、それぞれに収められた語彙を比較検討していく。その前に(1)～(4)の文献に収められた語彙集の概要をまとめ、以下に記載する。

(1) 児童言語研究会 (1962) 『言語要素指導』 明治図書

児言研(1962)には、「児言研・国語科教育基本語い(第一次試案)」が掲載されている。「われわれの基本語いの選びかた」として、「特に小中学生が、『それらを所有していることによって、よりよく思考や認識を活動させる表現・通達することができる語を。』という観点から選んだ」(p.95)としている。そして「日常の使用で自然におぼえられる語い」「主として他教科で教えられる語い」(同)などは省き、「系統的・体系的な国語教育が責任をもって教えなければならない、重要な語を精選した」(同)としている。

具体的には、金田一京助編『三省堂・国語辞典』(昭和35年12月発行)所収の5万7千語の中から、12名の国語教員が、「特に大切な語い」を「A語い」、「A語いに次ぐもの」を「B語い」とし、「A語い729語、B語い1,126、合計1,955語」(同)を選定している。なお、引用とは別の表では、A語い719語、B語い1,131語、計1,850語と記されている。

国立国語研究所(2000)は、「本文献は、児童言語研究会の考える『思考や認識を活動させる表現・通達することができる語を。』という趣旨で選定された基本語彙が提案されている。この提案は、日本の語彙指導の考え方に少なくない影響を与えた」(p.109)と評価している。

また、「国語教育に長い年月の経験をもつ現場人たちが、その体験を生かして子どもたちの発達度と語の必要性とを慎重に考慮しつつ『ぜひこれだけは身につけさせたい。』と念願する語が選び出されて

います」(p.95)として、経験主義に基づく選定であることが強調されている。

なお、「最初の基準」として挙げられているのは以下の7点である(p.97)。

- ①自然に覚えられるものとはらない。
- ②小・中学校より高度なものとはらない。
- ③他教科で主として指導するものとはらない。
- ④頻度数にはこだわらない。
- ⑤語構成や語体系からの観点は、今のところ問題にしない。
- ⑥自分でつかえるようにさせたい語い(能動語い)としてとりあげる。
- ⑦特に論理語いに重点をおく。

(2) 神戸大学教育学部語彙指導研究会(1985)『教育基本語彙の体系化とその指導方法の究明』
神戸大学教育学部

神戸(1985)には、「教育基本語彙 試案」が掲載されている。「教育基本語彙」を、「学習者が一人の言語生活者として自己確立をしていくために必要な、学校で習得させるべき最低限の語集団」(p.6)としている。1,736語が、国立国語研究所(1964)『分類語彙表』による「意味の観点」(自然、社会等)と、「発達の観点」(「小・低」「小・中」「小・高」「中学」)によって分類されている。

「教育基本語彙選定の経過」として、次の8点が記されている(pp.6-7、引用者による一部省略あり)。

- 1) 語彙を生活習得語彙と教育基本語彙との二つに大きく分ける。
- 2) 小・中学校の文学教材の語彙分析→感情語彙の選定と分類。
- 3) 小・中学校の説明文教材の語彙分析→論理語彙の選定と分類。
- 4) 「話題語句」「説明語句」という概念の導入。
- 5) 『新教育基本語彙』からわたしたちの考える論理語彙を、まず2,342語選出。
- 6) 論理語彙の構造化と系統化(この段階で約1,500語にしぼり、教科書の語彙を勘案して

必要と思われる論理語彙を加える)。

- 7) 「感情語彙」と「論理語彙」を統合して「教育基本語彙表 試案」を作成。
- 8) 語彙の系統化にあたっては、次の四つの先行調査に依拠した(林四郎他『学習基本語彙の基礎調査』等)。四者に異同のある場合は共同研究者の判断に依った。

国立国語研究所(2000)は、「本文献は、国語教育の理論的立場だけでなく実践的立場も重視した貴重な資料といえることができる」と評価している。文献の中でも「複数の学校や教室で実験的に授業」(p.7)を行い、また「教科書の語彙調査や学習者の語句・語学習の実態調査も必要に応じて」(同)行うなど、「わたしたちの語彙表は理論と実践の往復作業による積み上げの成果なのである」(同)とされている。

阪本(1984)が語彙選定の基盤に用いられているが、「頻度と直観を勘案して、大学教官と院生とで論理語彙を抽出」(p.109)したとあるのみで具体的な選定方法は明らかではない。

生活習得語彙を切り離して考えている点や、論理語彙に重きを置いている点などが、(1)児童言語研究会(1962)の考え方の重なる点である。なお本文献収録の「教育基本語彙 試案」は、浜本純逸(1990)に再録されている。

(3) 井上一郎(2001)『語彙力の発達とその育成—国語科学習基本語彙選定の視座から—』明治図書

井上(2001)には、1,663語の「国語科学習基本語彙」が掲載されている。本文献では、「学習基本語彙」を「学習者の側に立った語彙指導を推進する指導内容の参考となる語彙の選定」、「国語科学習基本語彙」を「各教科における指導内容の参考となる語彙の選定」と位置付けている(p.42)。

「選定と系統化のための細則」には次のように記されている。(pp.330-331、引用者による省略あり)。

- 1 語彙構造及び認識構造のそれぞれの中核とな

る語を選定する。

- 2 国語科学習基本語彙の独自性を保つために、生活基本語彙や教育基本語彙のレベルで考えられるものは、除くようにする。
- 3 具体的事物を表す名詞は、総称的・代表的なものを選ぶにとどめる。
- 4 四つの選定根拠（(1) 授業の語彙構造、(2) 日本語の語彙構造、(3) 教育理念に即した語彙構造、(4) 語彙力に即した語彙構造）の相関性をよく検討して判定すること。なお、授業の語彙構造の中心となる教材の語彙から選定された基幹語彙は最優先する。
- 5 書き言葉を中心として選定するが、話し言葉についても考慮する。

語彙の選定と系統化のために特に参照とした文献として47文献が語彙表の前に列記されている。さらに教科書調査、児童作文調査、語彙実態調査等、これまでの学習基本語彙研究の営みや諸データを「総合する形式で学年配当」(p.331)されている。ただし実証可能な選定方法は明記されていない。

またここにおける「国語科学習基本語彙」は、国語科における「専門性・特殊性・具体性を明らかにする」(p.354)という観点での「国語科学習用語」の要素も内包している。そのことを踏まえ、全国大学国語教育学会(2013)では本文献を「『国語科学習基本語彙』の選定は、国語科での『学習用語』の選定というかたちをとることで、国語科の教育内容そのものを「選定」することにつながっていったのである」と評価している(p.326)。

語彙選定における「語彙構造及び認識構造のそれぞれの中核となる語を選定」「生活基本語彙や教育基本語彙レベルで考えられるものは、除く」といった考え方は、(1)や(2)と近い。ただし上記のように異なる観点もあり、そのことが語彙の違いとして表れてくると想定される。

(4) バトラー後藤裕子(2011)『学習言語とは何か—教科科学習に必要な言語能力—』三省堂

前節で、田中(2015)による阪本(1984)らへの

根拠が不明示であるとの指摘を記したが、田中(2015)はさらに次のように述べている。

基準(根拠)を明示することはコーパスによって実現可能になることが予想される。そして、コーパスを用いることによって単に語彙の範囲を定め段階分けを行うのにとどまらず、様々な観点での語彙を明確に分類することが可能になり、従来の教育基本語彙を超える、大規模かつ精細な語彙データベースを作成することが可能になると見込まれる(p.4)。

バトラー後藤(2011)に収められている「学習語彙リスト」は、コーパスを活用し、選定基準を明示しているという点で、上記田中(2015)の記述と重なる。またバトラー後藤(2011)では、「日常生活語や非常に頻度の高い一般語でもなく、また専門分野でしか使用されない専門語でもない。教科分野をまたがって使用されるもので、かつ、教科内容の理解に欠かせない重要な語彙」を(p.122)を「学習語彙」としている。

選定資料として、筆者も作成に携わった田中牧郎他(2008)掲載の「教科書コーパス」を活用している。そして「一般語を除くこと、多くの分野をまたいで使用されていること、頻度が比較的高いこと」(p.125)という選定基準のもと、まず2008年時の「日本語能力検定試験」の4級及び3級の語彙を除き、次に「教科書コーパス」で4科目以上の教科書で使用されているものを選出し、さらに感動詞、固有名詞等を除き第1次リストを作成する。そして小中学校の教員や、日本語指導者による判断を加え、最終的に1,230語を選定している。

最終的に教育者の判断を加えている点は、他の3種と同じである。しかし基盤として、全教科の教科書を網羅した「教科書コーパス」を活用していること、基準(根拠)を明示していることが、語彙の違いに表れると想定される。

以上が比較検討の対象とする文献の概要である。次節において、各国語科学習基本語彙の比較の方法

と内容を示す。

3. 4種の語彙集の比較

まず前節で示した文献所収の4種の語彙集をデータベース化した。(1) 児言研(1962)については、国立国語研究所(2001)のデータを借用した。それ以外の語彙集は、全て打ち込みによりデータベースに取り入れた。

また国立国語研究所(2001)のデータは、国立国語研究所(1964)『分類語彙表』のデータと紐づけされている。そこで新たに打ち込んだデータも全て『分類語彙表』と紐づけをして、『分類語彙表』の「類別」、「部門」別に、それぞれの語彙の特徴を見ることにした。

4. 『分類語彙表』・「類別」別特徴

まず、『分類語彙表』の「類別」別に語彙をまとめた図表が以下の通りである。表1には各語彙集の「類別」別の度数を、図1には、その割合をグラフとしてまとめた。なおここにおける総度数は、前節で示した各語彙集の総語数を若干下回っている。それは各語彙集に語の重複が見られたり、語として処理できない複合語が見られたりしたためである。例えば(3)井上(2001)には「手を入れる」といった語句もリストアップされているが、こうした語句は今回の分析対象から外している。

なお図表の凡例は以下の通りである。

- (1) 児言…児言研(1962)
- (2) 神戸…神戸(1985)
- (3) 井上…井上(2001)
- (4) バト…バトラー後藤(2011)
- 1. 体…名詞類、『分類語彙表』における分類、以下同様
- 2. 用…動詞類
- 3. 相…形容詞類
- 4. 他…その他の類
- 5. 無…『分類語彙表』にはない語

表1 「類別」別・度数

	(1) 児言	(2) 神戸	(3) 井上	(4) バト
1. 体	<u>1,479</u>	1,145	992	795
2. 用	142	248	<u>276</u>	<u>335</u>
3. 相	178	252	164	68
4. 他	23	46	24	7
5. 無	21	11	12	4
計	1,843	1,702	1,568	1,209

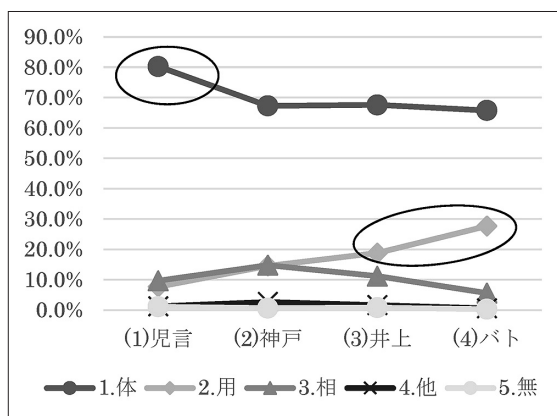


図1 「類別」別・割合

「類別」別に比較した特徴として次の2点に着目したい。表1に下線並びに図1に丸印を付けている。一点は、「(1) 児言研(1962)」の「1. 体(名詞類)」の度数、割合が他に比べて高い点である。もう一点は、「2. 用(動詞類)」の度数、割合が(1)から(4)にかけて増加の傾向にある点である。

(1) 児言研(1962)の「体(名詞類)」の特徴

表1にあるように、児言研(1962)の語彙の中で、体(名詞類)に分類できた語彙は1,479語であった。そのうち今回の調査で、児言研(1962)にしか出現しない語、つまり他の3つの語彙集には出現しない語が733語であった。約半数が、児言研(1962)にしか出現しない語であったことは大きな驚きであった。

児言研(1962)にしか出現しない733語をさらに児言研(1962)の区分に分けると、表2の通りになる。児言研の中で、前述の通り、「[A]は「特に大切な語」、[B]は「A語いに次ぐもの」とされている。

表2 児言研(1962)のみの体(名詞類)の度数

小A	小B	中A	中B	計
83	247	68	335	733

上記表2は、児言研(1962)で「A」、すなわち「特に大切な語い」とされた151語(83+68)が、その後の語彙集には出現していないことを示している。

ではその151語がどのような語彙なのか。ここでは、2019年度版の毎日小学生新聞のデータというフィルターをかけた上で示してみたい。2019年度版の毎日小学生新聞については、河内(2021)で解析したデータを用いた。児言研(1962)のみにしか出現しない「A」・「特に大切な語い」のうち、2019年度版の毎日小学生新聞に30回以上出現する語彙が、「小A」83語中22語、「中A」68語中9語であった。なお詳細は河内(2021)に記しているが、河内(2021)における2019年度版の毎日小学生新聞の総延べ語数が約10万語、総異なり語数が約3万語であった。「30回以上」は、総延べ語数に対する1語のおよその平均度数を指している。

表3に、「小A」83語中、2019年度版毎日小学生新聞に30回以上出現する22語を、表4に、「中A」68語中、同9語を列記する。なお語順は、度数順となっている。

表3 「小A」83語中22語

委員	ルール	憲法	公式	資格
クラス	正式	用意	共同	勢力
運営	自身	期限	方針	訓練
連絡	価格	当初	クラブ	協議
便利	権力			

表4 「中A」68語中9語

協定	提出	機構	推進	原子
連携	拠点	近代	破壊	

上記表3、表4はいずれも、児言研(1962)のみにしか出現しない語でありながら、2019年度版の

毎日小学生新聞に一定数以上の出現が見られる語である。また、児言研(1962)は前節で述べたように、教育者による判断によって選定された語である。

1962年発行の文献所収の語彙集で、教育者によってA(特に大切な語い)とされた語の多くが、その後の語彙集には見られず、しかしながら2019年度版の小学生向けの新聞には多く使用されているということになる。語彙集の概要だけでは分からない事実である。これまで述べてきたように、語彙集それぞれ判断基準が異なるために、こうしたことが起こり得るのだろう。なお語彙集による語彙の違いについてはこの後さらに述べる。

一方で、児言研(1962)でA(特に大切な語い)とされながらの後の語彙集に見られず、かつ2019年度版の毎日小学生新聞にも一度も見られない語もある。表5、表6の通りである。これらの語が、あるいは一般社会の中で徐々に使われなくなったのか、あるいは1962年当時に重要だと判断された理由は何だったかなど、今後検証していきたい。

表5 「小A」83語中18語

あらまし	趣	概略	事物	特長
打消し	たち(質)	群集	従事	起こり
積もり	再考	処置	終止	前置き
民主主義	銘	銘	抛り所	

表6 「中A」68語中24語

陰	遠心	オートメーション	消耗	カリキュラム
枚挙	欧米	起因	面目	価値判断
引例	用法	異説	具象	捨象
命題	要	公理	慣用	遂行
概括	可否	演繹	同一性	

(2) 井上(2001)の用(動詞類)の特徴

先に図1「類」別・割合の特徴として、用(動詞類)の度数、割合が増加の傾向にあることを述べた。ここではそれに関連して、井上(2001)の用(動詞類)について簡潔に述べる。

表1の通り、井上(2001)からは用(動詞類)に

分類される語を 276 語抽出している。そのうち 139 語が、他に語彙集には見られない語であった。井上 (2001) の分類に従って記したのが、下記表 7 である。

表 7 井上 (2001) のみの「用 (動詞類)」の度数

小・低	小・中	小・高	中	計
121	12	5	1	139

上記表 7 の通り、139 語中 121 語が「小・低」(小学校低学年)に分類されていることが分かる。紙面の都合上、一覧表示はしないが、具体的には「遊ぶ」「歩く」「行く」といった語などであった。

こうした基礎的な語を選定していることが、井上 (2001) の特徴であることが分かる。また、こうして基礎的な語を国語科学習基本語彙とするべきかどうかについて今後検討していく必要がある。

(3) それぞれの語彙集にしかない語の割合

前項、前々項で述べてきたように、それぞれの語彙集にしかない語が少なくない。そこで改めて、それぞれの語彙集にしかない語の割合を整理したのが下記表 8 である。これまでと同様に、分類語彙表の「類」別(体・用・相)に分けられる語の中で、それぞれの語彙集にしかない語の割合を算出した。40%以上となる数値に下線を引いてある。

表 8 それぞれの語彙集にしかない語の割合

	(1) 兎言	(2) 神戸	(3) 井上	(4) バト
1. 体	<u>49.6%</u>	25.1%	<u>40.3%</u>	<u>43.0%</u>
2. 用	39.4%	38.7%	<u>50.4%</u>	<u>59.7%</u>
3. 相	<u>65.2%</u>	<u>44.8%</u>	<u>40.9%</u>	29.4%

上記表 8 の通り、どの語彙集も「類」別に 40% を超える部分がある。今回調査の対象としたのは、いずれも二千字弱の規模の近い 4 種の語彙集である。しかし選定方法、判断基準が異なれば、そこに収められる語彙は大きく変わるということを表 8 は示している。語彙集の概要のとりまとめにとどまらず、語彙集同士を比較することで明確に見えてくる事実である。

(4) 全ての語彙集にある語

一方で、今回調査した 4 種の語彙集の全てに出現する語が 146 語ある。「類」別の内訳は下記表 9 の通りである。

表 9 全ての語彙集にある語

1. 体	2. 用	3. 相	4. 他	計
128	10	7	1	146

上記表 9 の通り、全ての語彙集にある 146 語のうち 128 語が、体(名詞類)に分類される語であった。

また前々項と同様に、体(名詞類)に分類される 128 語について、2019 年度版の毎日小学生新聞における出現状況を調査した。すると、128 語中 95 語が、毎日小学生新聞に 30 回以上出現する語であった。さらにそのうち 43 語は、毎日小学生新聞に 100 回以上出現する語であった。

以下表 10 に、全ての語彙集にある 146 語の中で、2019 年度版毎日小学生新聞に 100 回以上出現する 43 語を示す。

表 10 146 語中 43 語

発 表	代 表	調 査	活 動	記 録
対 策	対 象	平 和	環 境	自 然
確 認	最 大	能 力	体 験	方 法
一 般	判 断	人 間	種 類	組 織
場 面	批 判	指 導	効 果	内 容
部 分	報 告	仕 組 み	実 験	テ ー マ
未 来	作 業	実 現	特 徴	状 態
解 決	表 現	実 際	決 定	使 用
情 況	話 題	評 価		

これまで述べてきたように、今回調査した 4 種の語彙集は選定方法や判断基準が異なり、それぞれの語彙に大きな違いがある。しかし一方で上記表 10 のように、4 種の語彙集に共通する語彙を抽出してみると、「発表」という語以下、確かに重要と思える語がそこにあることが分かる。表 10 は、複数の語彙集、資料を組み合わせれば、確実な重要語を選定し得ることを示唆していると言えるだろう。

5. 『分類語彙表』・「部門」別特徴

次に、『分類語彙表』の「部門」別に割合をまとめたものが、以下の表11並びに図2である。

『分類語彙表』の「部門」を表11及び図2の凡例として示す。

1. 抽象…抽象的關係
2. 人間…人間活動の主体
3. 精神…精神および行為
4. 生産…生産物および用具
5. 自然…自然物および自然現象

表11 「部門」別・割合

	(1) 児言	(2) 神戸	(3) 井上	(4) バト
1. 抽象	49.6%	51.3%	47.2%	<u>55.7%</u>
2. 人間	2.0%	2.6%	5.1%	2.7%
3. 精神	<u>46.4%</u>	43.6%	41.0%	29.3%
4. 生産	0.4%	0.3%	2.2%	4.3%
5. 自然	1.6%	2.2%	4.5%	8.0%

「部門」別に比較した特徴として次の2点に着目したい。表1に下線並びに図1に丸印を付けている。一点は、「(4) バトラー(2011)」の「1. 抽象的關係」の割合が他に比べて高い点である。もう一点は、「(1) 児言研(1962)」の「3. 精神および行為」の割合が他に比べて高い点である。

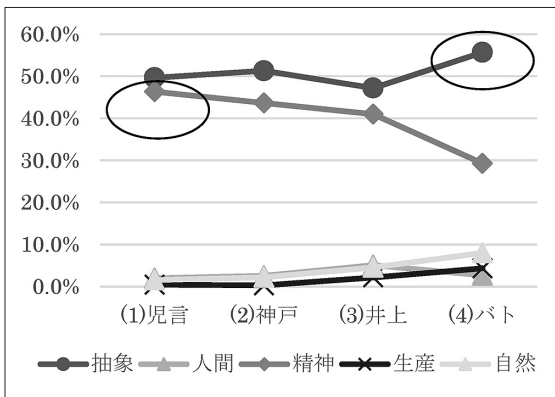


図2 「部門」別・割合

(1) バトラー後藤(2011)の抽象的關係の特徴

バトラー後藤(2011)のみに見られる「抽象的關係」の語数をまとめたものが以下の表12である。上段の「類/部門」について、例えば「2.1」であれば、前半の「2」は類「用(動詞類)」、後半の「1」は部門「抽象的關係」を示している。またバトラー後藤(2011)では、主な選定資料とした「教科書コーパス」における出現状況に合わせて、語彙を「頻度・最高/頻度・高/頻度・中/頻度・低」の4つに分類している。表12の最下段には「頻度・最高」に分類される語数を示している。

表12 バトラー後藤(2011)のみの「抽象的關係」

類/部門	1.1	2.1	3.1
語数	131	130	19
頻度・最高	43	40	6

まず「体(名詞類)」と「用(動詞類)」はほぼ同数であることが分かる。これは前節で示した「類」別の特徴と同様である。下記表13に、「用(動詞類)」に分類される40語を掲げることとする。

表13 バトラー後藤(2011)のみの「用(動詞類)」

利く	役立つ	ずれる	隠す	生じる
引き起こす	作りあげる	構える	倒す	組む
緩める	傷つける	汚す	置き換える	終わる
傾く	転がす	敷く	下る	這う
漉す	取り込む	吸い込む	被せる	取り巻く
会う	纏まる	ほぐす	放つ	引きつける
剥がす	剥ぐ	丸める	縮む	薄める
深まる	目立つ	欠かす	折り曲げる	関わり合う

(2) 児言研(1962)の「精神および行為」の特徴

最後に、児言研(1962)における「精神および行為」に分類される語彙について触れる。

児言研(1962)は第1節で述べた通り、思考や認識に関わる語を中心に選定されている。そこで『分類語彙表』の中で、思考や認識に関する語が多く分類されている項目「1.3066 判断・推測・評価」と

照合する語の出現状況を調査した。

児言研(1962)にある語で、「1.3066 判断・推測・評価」に分類される語は36語であった。そのうち4種の語彙表全てにある語が5語あり、表14に示した。またそのうち児言研(1962)にしかない語が13語あり、表15に示した。それぞれに児言研(1962)における分類(小A・B、中A・B)を付している。

表14 36語中5語

判 断	予 想	観 点	推 定	評 価
小 A	小 A	中 A	中 A	中 B

表15 36語中13語

見 極 め	方 針	推 察	着 眼	価値判断
小 A	小 A	小 B	小 B	中 A
診 断	憶 測	予 期	予 見	看 破
中 B	中 B	中 B	中 B	中 B
達 観	洞 察	度 外 視		
中 B	中 B	中 B		

上記表14については、前節「(4) 全ての語彙集にある語」と述べたことと同様で、複数の語彙集を組み合わせることで確かな重要語を選べるであろうことがここでも見て取れる。

一方で表15を見ると、現代的視点で必ずしも重要とは思えない語もある。小学生にとって「見極め」という語は重要だろうか。あるいは中学生にとって「価値判断」や「看破」という語は重要だろうか。これらは時代の違いによるものか、あるいは児言研(1962)における選定方法等の特性によるものなのか、今後検討を試みたい。

6. 今後の課題

以上、本研究では4種の語彙集の語彙について検討を行ってきた。選定方法や判断基準の違いにより、同程度の規模の語彙集でもその内実は大きく異なることを明らかにした。ただし、ここでは特に児言研

(1962)の「体(名詞類)」で考察したが、過去の特定の語彙集にしか出現しない語であっても、その語が現代の小学生新聞において相当数使用されている語であることも分かった。また一方、4種の語彙集に共通する語の一覧には、重要と判断できる語が並んでおり、複数の語彙集、資料を組み合わせることが有効と思われることも示した。

次の機会にはまず、『分類語彙表』の「部門」別の語彙の特徴について考察を進める。前節で示した「見極め」「価値判断」のような語が、選定当時、教育者の判断によって「特に大切な語」とされた背景を探りたい。またそれらの語の現代までの変遷をたどりたい。

これまでの語彙集の多くは、資料と教育的判断の組み合わせによって語彙が選定されてきている。特に教育的判断の検証ができないことが課題であることをすでに述べた。しかし検証可能なデータだけでは十分な語彙の選定はできないことも、河内(2019)をはじめ、これまでの研究で示してきた通りである。適切な資料と選者の判断をどのように組み合わせれば、学習者にとって本当に必要な語彙を選べるか。引き続き検討を重ねていきたい。

【引用・参考文献】

- ・田中久直(1956)『国語科学習基本語彙 指導の実際』新光閣書店
- ・阪本一郎(1958)『教育基本語彙』牧書店
- ・児童言語研究会(1962)『言語要素指導』明治図書
- ・国立国語研究所(1964)『分類語彙表』秀英出版
- ・中央教育研究所(1976)『学習基本語彙の基礎調査 研究報告第7冊』中央教育研究所
- ・国立国語研究所(1984)『日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版
- ・阪本一郎(1984)『新教育基本語彙』学芸図書
- ・神戸大学教育学部語彙指導研究会(1985)『教育基本語彙の体系化とその指導方法の究明』神戸大学教育学部
- ・浜本純逸(1990)『小学校語彙指導の活性化』明治図書
- ・甲斐睦朗・石黒由香里(1993)『国語教育基本論文集成第21巻 国語科言語教育論(3) 語句・語彙指導論』明治図書

- ・塚田泰彦・池上幸治（1998）『語彙指導の革新と実践的課題』明治図書
- ・国立国語研究所（2000）『日本語基本語彙—文献解題と研究—』明治書院
- ・井上一郎（2001）『語彙力の発達とその育成—国語科学習基本語彙選定の視座から—』明治図書
- ・全国大学国語教育学会（2002）『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書
- ・田中牧郎他（2008）『言語政策に役立つ、コーパスを活用した語彙表・漢字表等の作成と活用』特定領域研究「日本語コーパス」言語政策班
- ・国立国語研究所（2009）『教育基本語彙の基本的研究—増補改訂版—』国立国語研究所
- ・全国大学国語教育学会（2013）『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書
- ・甲斐睦朗（2020）『小学校国語 語彙に着目した授業をつくる』光村図書
- ・バトラー後藤裕子（2011）『学習言語とは何か—教科学習に必要な言語能力—』三省堂
- ・田中牧郎（2015）『講座日本語コーパス4 コーパスと国語教育』朝倉書店
- ・河内昭浩（2021）「小学校教科書語彙の研究（2）」
- ・群馬大学共同教育学部『群馬大学教育学部共同教育学部紀要 人文・社会科学編』第71巻
- ・全国大学国語教育学会（2022）『国語科教育学研究の成果と展望Ⅲ』溪水社

【謝辞】

本研究は科研費（課題番号 23K02476）の助成によるものです。